

# 香川高等専門学校詫間キャンパスにおける 英語教育の現状と課題

森 和憲\* ジャンストン・ロバート\*\*

## Developments in the English teaching methods at Kagawa National College of Technology Takuma Campus

Kazunori MORI, Robert JOHNSTON

### Abstract

Many progressive additions to the English Teaching methods have occurred at Kagawa National College of Technology, Takuma campus over the last decade. There have been several approaches implemented to improve students' English comprehension, including establishing a new curriculum, Computer Assisted Language Learning, extensive reading, English lessons with manipulative props, training for English speech contests and so on. These approaches may be a good attempt to initiate new types of classroom English lessons. There appeared, however, no significant improvements in students' English ability when we looked at their TOEIC and other test scores. This indicates a need for more integration of these approaches, and a longer longitudinal evaluation.

*Keywords:* English Teaching, English for Academic Purpose, Computer Assisted Language Learning

### 1. 緒言

近年の国際化に伴い、英語運用能力は技術者にとって必須であり、高等専門学校（以下、高専）において、英語は最重要科目の一つとして認識されるべき科目である。

その一方で、田村(2010)<sup>1)</sup>や宮本(2010)<sup>2)</sup>で指摘されているように、英語に対して苦手意識を持っている学生は高専に多く、数学や専門科目が難しいこともあってか、それらの授業に力を入れてしまい、英語を一生懸命に勉強している学生は少ないように見受けられる。

このような状況を打開すべく、筆者が勤務している香川高専詫間キャンパス（以下詫間キャンパス）では過去10年間で多くの試みが英語授業や課外授業で行

われてきた。本稿では、これらの活動を総括し、その効果を検証しつつ、今後の改善点と展望を論じる。

### 2. カリキュラム

詫間キャンパスでは表1のような授業を展開している。

表1. 新・旧カリキュラム表

2009年度(旧課程)				2014年度(新課程)			
学年	科目名	単位数	中心的な活動	学年	科目名	単位数	中心的な活動
1年	英語 I	2	文法	1年(新)	英語IA1	4	総合
	英語 II	2	読解		英語IA2	2	読解
2年	英語 III	1	聴解	2年(新)	英語IB	2	読解
	英語 IV	3	文法		英語IIA1	3	総合
3年	英語 I	2	読解	3年(新)	英語IIA2	2	読解
	英語 II	3	文法		英語IB	2	読解
4年	英語 III	2	読解	4年(新)	英語IIIA	2	総合
	英語 IV	2	総合		英語IIIB	2	読解
5年	英特	1	総合	5年(新)	語学演習	2	演習
	英語 V	1	総合		英語特講1	2	総合
	英語 VI	1	総合		英語特講2	2	総合
	計	20			計	21	
専攻科 1年	コミュニケーション 英語 I	前期1 後期1	総合	専攻科 1年	コミュニケーション 英語 I	前期1 後期1	総合
専攻科 2年	コミュニケーション 英語 II	前期1 後期1	総合	専攻科 2年	コミュニケーション 英語 I	前期1 後期1	総合

\* 香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

\*\* 香川高等専門学校詫間キャンパス 非常勤講師

香川高等専門学校は旧詫間電波工業高等専門学校と旧高松工業高等専門学校が高度化再編された学校であるため、詫間電波工業高等専門学校の旧課程と香川高等専門学校の新課程が平成 22 年度から 25 年度まで混在している状況にある。

旧課程と新課程の大きな違いは科目名と時間数である。まず学年ごとに英語Ⅰ、英語Ⅱといった科目名が存在していたが、1 年生は英語Ⅰ、2 年生は英語Ⅱというように 3 年間を通じて連続する科目名にした。また、基礎力向上を目指して、1 年生と 3 年生を 1 時間ずつ増やした。

それぞれの授業については、担当教員によって指導内容や方法を変えている。検定教科書は各学年で 1 度は使うように設定し、特に非常勤講師の授業で使っている。一方、常勤教員の授業では多読、CALL、TOEIC に特化した授業、アメリカで発売されている小学生向けの本を使用した授業などが行われ、それぞれに特色のある授業になっている。

学年担当の教員はほぼ固定されており、持ち上がりでの指導はほとんど行われていない。また、可能な限りクラスや学科を越えて同一科目を一人の教員が担当するように配置している。このため、専任の英語教員が 3 年生までの間に全ての学生を一度は教えることになり、英語のみならず普段の学生指導もスムーズに行えるようになっている。

### 3. 詫間キャンパスの特色ある英語教育

#### 3.1. CALL 教育

詫間キャンパスはコンピュータを利用した英語教育に力を入れている。平成 16 年度にコンピュータ 48 台が備わった CALL 教室（マルチメディア・ラーニングラボ）が構築された。平成 24 年度の更新に伴い、現在は第二世代のシステムが本校情報基盤センターの管理下で稼働している。

現在のシステムは自動イメージ配信および復旧システムや汎用的な授業支援システムのみを搭載し、特に語学に特化した CALL システムは導入されていない。しかし、自前の教材やインターネット上で無料利用できる英語教育サイトを利用することにより、語学演習教室として十分に機能している。

現システムで行っている主な授業内容は次の通りである。

- 1) PowerPoint を利用した英文法授業
- 2) 英単語音声ファイルの視聴・配布
- 3) 英文法解説ビデオファイルの視聴・配布
- 4) KOSEN ENGLISH TOWN の利用

5) COCET3300 の利用

6) ALC Net Academy

1)～3) までは筆者が自作しているものである。4) は岐阜工業高等専門学校の亀山太一教授によって運営されている英文法・語彙学習サイトである。5) は放送大学によって運営されている高専生に特化した単語学習サイトであるが、平成 24 年度末に閉鎖されることが決まっている。6) はアルク教育社が販売している TOEIC 学習用ソフトウェアである。

さらに、コンピュータを利用した英語教育との関連でいえば、iPad50 台を平成 23 年度高専教育改革推進経費で導入し、主に英文法解説ビデオの視聴に用いている（写真 1）。



写真 1. iPad を利用した英語授業

#### 3.2 ものづくり英会話

授業で英文法を集中して指導すると、どうしてもモチベーションが下がってしまう。そこで英文法を習う事で、英会話も上達するということを体感させるため、Lego ブロック（以下レゴと表記）を利用したものづくり英会話授業を行っている<sup>註1)</sup>。具体的な方法としては、1) 組立作業においては、レゴを組み立てる者とマニュアルを見て指示する者との役割分担をする。2) 組立てる側は組立マニュアルを見ず、また指示する側はパーツに触ってはいけないというルールのもとに作業する。3) 組立て作業中は日本語を禁止し、組立マニュアルの指示や質問はすべて英語で行う。4) ディスカッションの時間を設定し、会話が困難になった場面とその解決策などを議論する、という手順で行っている。

さらに専攻科 1 年生「工業英語」では Lego We Do や Lego Mindstorms を使って、次のような手順で組み立てやプログラミングを行っている（写真 2）。1) 学生（二人ないし三人一組チーム）にどんな動きをレゴにさせるか決めさせる。2) 英語でその動きを簡単に口頭発表させる。3) プラン通りにレゴを組み立て、プログラミングする。4) 組み立てたレゴを実演しながら英語で



### 3.4 英語コンテスト

本校の学生が参加している英語関連のコンテストは四国地区高専英語スピーチコンテストと全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストである。

四国地区高専英語スピーチコンテストは年に1度開催され、平成24年度で28回目を迎えた。暗唱部門(各校1および2年生最大2名)と自由弁論部門(学年不問各校最大3名)が行われており、本校でも暗唱部門は2名、自由弁論部門に2~3名毎年出場させている。

次に全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストであるが、平成24年度に第6回大会を終えた。スピーチ部門とプレゼンテーション部門に分かれ、スピーチ部門は地区大会の上位入賞者16名が、プレゼンテーション部門はビデオ予選もしくは近畿地区予選を通過した10チームが出場し、競技を行う。スピーチ部門は先に述べた四国地区高専英語スピーチコンテスト自由弁論部門の上位大会として位置づけられ、プレゼンテーション部門は3名が1チームを組んで英語プレゼンテーションを行うものである。

これらコンテストのために英語教員は、選手を選出してトレーニングをする必要があるが、特に詫間キャンパスの学生は英語に興味を失っている学生が多く、参加者を募る段階から苦勞している。選手選出のために応募者の中からオーディションを開いている高専もあるようだが、詫間キャンパスの現状としては、1~2年生の中から発音や記憶力に優れ、かつ英語に興味がある学生に直接声をかけて暗唱部門に参加させ、その学生が3年生以上になった時に自由弁論部門やプレゼンテーションコンテストに参加させるという状況である。

コンテスト前はほぼ毎日指導を行っているが、時期的に後期中間試験や学園祭などの学校行事と重なっているため、トレーニングの時間を確保することが教員も学生も難しい中で行っていかなければならないことが課題である。

### 3.5 英語サロン

週に2回、放課後1時間程度で、英語母国語話者の非常勤講師を囲んで英会話を楽しむ「英語サロン」を平成23年度より開いている。これは英語による自己表現力や聴解力の訓練をすることにより、英語でのコミュニケーション能力を向上させることを目的としている。希望者を対象とし、毎回数名が参加し、年間を通じての延べ30名程度が参加している(写真3)。

内容に関しては特に指定はなく、日常的な話題につ

いて学生たちと英語母国語話者が英語で語るといった形をとった。英語教員や専門学科の教員も時折同席し、学生たちの会話の手助けをしたり難しい単語を言い換えたりして、指導の補助をしている。希望者のみの参加ということもあり、熱心な学生たちが多く、自分の意図をどう表現していいか戸惑う場面も多くあったが、間違いを恐れずに一語でも多く発話するように指導した。



写真3. 英語サロンの授業風景

### 3.6 国際交流

国際交流は当然のことながら英語教育と密接な関係がある。過去には短期ホームステイプログラムを企画し、オーストラリアやカナダに学生を引率したこともあった。しかし、昨今の経済状況もあり、40万円以上を自己負担するプログラムに応募する学生は少なく、平成21年度以降は実施できていない。そこで現在は学術交流協定を結んでおり、比較的安価に実施できると思われるニュージーランドの Christchurch Polytechnic Institute of Technology (CPIT) の語学学校へ1ヶ月程度派遣するプログラムを計画中である。



写真4. 米国からの訪問者にレゴのプログラミングを指導している学生

また、本校は5カ国・地域の合計6つの教育機関と学術交流協定を結び、協定活動の一環として学生派遣や国際シンポジウムが行われているが、プレゼンテーション作成などで英語教員がサポートをしている。

さらに、詫間キャンパスが所在する三豊市の国際交流協会と協力し、姉妹都市の米国ウィスコンシン州ワウパカ市からの訪問団を受け入れ、施設見学や学生との交流を行っている。平成24年度は中学生4名と引率者4名が詫間キャンパスを訪れ、学生と一緒にLego Mindstormsを作った(写真4)。

#### 4. 取り組みの評価

以上に詫間キャンパスにおける英語教育の取り組みについて述べてきたが、これらの試みは詫間キャンパスの学生にとってどのような効果があったのだろうか。外部試験の結果と、学生に対して行った質問紙調査の結果を基に考察していきたい。

#### 4.1 外部試験の結果

詫間キャンパスではNPO 英語運用能力評価協会が提供しているBACEテストおよびACEテストを年2回、本科1年生から3年生全員を対象に行っている。またTOEIC IPテストを本科4年生および専攻科1年生全員を対象に年1回行っている。表3、4はその結果である。

表3. BACE およびACE 平均スコアの推移

BACE(1年生で実施)				ACE(2年生と3年生でそれぞれ年2回実施)					
入学年度	1回目	2回目	伸長差	2年次		3年次			伸長差
				1回目	2回目	3回目	4回目		
				H18			412	396	-16
				H19	396	378	406	409	13
H20	158	158	0	H20	376	351	397	416	40
H21	158	161	3	H21	394	389	413	420	26
H22	155	171	16	H22	429	430	418	448	19
H23	165	170	5	H23	424	410			-14
H24	173	176	3						

表4. TOEIC 平均スコアの推移

TOEIC	H21	H22	H23	H24
4年生一斉受験	243.8	280.0	288.8	260.0

ACE, BACE テストを導入した当初は、前期と後期で一回ずつ実施することで、前期から後期にかけての点数の伸びを期待していた。しかし、表3が示すように、年度内で平均スコアが落ちているケースも見られ、残念ながら期待したほどにはスコアに伸びが見られなかった。

一方TOEICテストについては、平成21年から23年にかけては伸びの傾向が見られていたが、平成24年度

は28点も平均が下がった。

これらを総合すると、第3章で述べた詫間キャンパスにおける英語教育の様々な取り組みは、残念ながらTOEIC, ACE, BACE テストなどの外部試験の結果には現れていないといえる。

#### 4.2 質問紙調査

次に、学生が詫間キャンパスの英語教育に対してどのように考えているか情意的側面を調べるため、質問紙調査を平成25年2月に行った<sup>注3)</sup>。質問と結果を表5、6に示す。

表5. 質問紙調査の質問項目

質問および順序尺度
1 あなたは自分の英語力を伸ばしたいと思っていますか？ 伸ばしたくない 1 2 3 4 5 伸ばしたい
2 あなたは将来社会人になったら英語は必要だと思いますか？ 必要ではない 1 2 3 4 5 必要だ
3 英語力は努力したら伸びると思いますか？ 思わない 1 2 3 4 5 思う
4 英語授業を卒業するより英語力が身につきますか？ 思わない 1 2 3 4 5 思う
5 社会で活躍している先輩の英語体験について聞いてみたいと思いますか？ 思わない 1 2 3 4 5 思う
6 放課後にネイティブスピーカーと会話ができるようなサービスがあれば、利用したいと思いませんか？ 思わない 1 2 3 4 5 思う
7 これまでの英語授業で授業に意欲的に取り組みましたか？ いいえ 1 2 3 4 5 はい
8 これまでの英語授業で授業の難易度は自分に合っていましたか？ いいえ 1 2 3 4 5 はい
9 これまでの英語授業で授業のスピードは自分に合っていましたか？ いいえ 1 2 3 4 5 はい
10 これまでの英語授業で文法が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
11 これまでの英語授業で単語力が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
12 これまでの英語授業でライティング力が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
13 これまでの英語授業でスピーキング力が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
14 これまでの英語授業でリーディング力が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
15 これまでの英語授業でリスニング力が身に付きましたか？ 身に付かなかった 1 2 3 4 5 身に付いた
16 これまでの英語授業で英語にますます興味を持つようになりましたか？ 興味を持つようにならなかった 1 2 3 4 5 興味を持つようになった
17 これまでの英語授業で使われた教材は自分の英語力を伸ばすのに適切でしたか？ 適切ではなかった 1 2 3 4 5 適切であった
18 これまでの英語授業で教師の説明は分かりやすかったですか？
19 授業の内容はどのくらい分かりますか？ 1:0-20% 2:21-40% 3:41-60% 4:61-80% 5:81-100%
20 授業への参加度を点数化するどのくらいですか？ 1:0-20点 2:21-40点 3:41-60点 4:61-80点 5:81-100点
21 英語の家庭学習は一週間にどのくらいしていますか？ 1:していない 2:1日 3:2日 4:3日 5:4日以上
22 平均すると1日どのくらいしていますか？ 1:していない 2:1-20分 3:21分-40分 4:41分-60分 5:61分以上
23 家庭学習をしていないと答えた人は、なぜしていないのですか？その理由を書いてください。(自由記述)
24 あったら教えてください。

表6. 質問紙調査集計表

質問番号	1年 (n=84)	2年 (n=70)	3年 (n=77)	4年 (n=67)	5年 (n=40)	1・2年 (n=26)	全学年 (n=364)
1	4.63	4.3	4.22	4.34	4.35	4.42	4.38
2	4.51	4.31	4.09	4.25	4.35	4.46	4.32
3	3.76	3.87	3.86	4	3.93	4.23	3.9
4	3.6	3.3	3.17	3.27	3.43	3.38	3.35
5	2.98	3.11	3.06	3.25	3.48	3.5	3.16
6	2.56	2.97	2.94	3.25	3.18	3.15	2.96
7	3.39	2.97	3.1	3.04	2.98	3.23	3.13
8	3.07	3.33	3.1	3.34	3.18	3.46	3.22
9	3.13	3.31	3.14	3.4	3.15	3.5	3.25
10	3.06	2.93	2.81	2.88	2.6	2.96	2.89
11	3.36	3.34	3.01	2.94	2.75	2.92	3.11
12	3.02	3.03	2.84	2.76	2.7	2.58	2.87
13	2.77	2.63	2.55	2.61	2.43	2.85	2.63
14	3.12	3.13	2.78	2.9	2.75	3.12	2.97
15	2.94	2.79	2.7	3.03	2.4	2.92	2.82
16	3.04	2.96	2.92	3.01	3.45	3.31	3.06
17	3.32	3.33	3.17	3.13	3.33	3.46	3.27
18	3.69	3.33	3.04	3.3	3.63	3.65	3.4
19	3.18	3.37	3.53	3.42	2.88	3.54	3.33
20	3.7	3.5	3.66	3.54	3.23	3.42	3.55
21	2.36	1.9	2.14	1.91	1.63	1.77	2.02
22	2.45	1.91	2.19	1.85	1.48	1.73	2.02

調査対象は本科1年生から専攻科2年生までの364名で、人数を可能な限りそろえる為、各学年において任意の2クラス・学科で実施した。ただし4,5年生は選択授業のため受講数が少なく、また専攻科生も全員の回答を得ることができなかったため、5年生と専攻科

生の回答数が少ない。

回答は1から5までの段階評定法を用いて、平均値が5に近い方が肯定的であると捉えることができるように質問を設定した。

結果として特筆すべきは、質問1, 2の平均値が4を越えている反面、質問21, 22の平均値が2に近いということである。これは、「英語力を伸ばしたい」、「英語は必要だ」と思っている学生が多いにも関わらず、普段から英語を勉強しようとする意欲に乏しいことを示しており、森(2005)<sup>5)</sup>で行われた高専生と高校生を比較した英語学習意識調査の結果を支持するものである。

森(2005)では、1)高専生は英語学習の実用的価値の高さや重要性を十分認識しており、その認知度は高校生に比べ若干高い、2)英語を使いこなせるようにすることに対して、高校生と同様に憧れがある、3)英語を勉強する気力に結びついていない高専生の割合は高校生に比べ若干多い、ということが指摘されているが、詫間キャンパスにおいては約8年を経た今でも当時と状況は変わっていないように見受けられる。

今回の調査では学習日数と、1日あたりの時間数を分けて質問したため、正確な学習時間を導きだすことはできない。しかし一週間における学習日数が約1日程度、また、平均すると1日20分以内という平均値からは、普段の1週間あたりの英語学習時間は多くても2時間程度で、高学年になればなるほどゼロに近いと推察できる。この程度の英語学習時間では、先に述べた外部試験で満足のいくスコアを取ることは難しい。

ではなぜ学生は英語を勉強しないのであろうか。表7は質問23の自由記述回答を大まかに分類したものである。その回答数から判断すると、学生たちは英語に興味が無く、苦手であるがゆえに英語を勉強する優先順位を下げてしまっているということがわかる。やはりモチベーションの向上のためには、英語の必要性を説いたり、目標をはっきりと定めたりする必要がある。また、難しく授業についていけない、勉強方法がわからないという回答も相当数あったので、授業での対応が求められる。

表7. 質問23の回答分類

質問23. 家庭学習をしていないと答えた人は、なぜしていないのですか?	回答数
やる気が起きない・興味がない・めんどくさい	69
研究や部活、他の教科のため、英語に割く時間がない	55
何をしたらよいかわからない(勉強方法がわからない)	10
自分に甘えてしまっている・習慣が身につけていない	10
難しく分からない・ついていけない	8
英語が嫌いだから	5
理由がわからない	6
その他	20
	183

さらに、英語授業との関連で言及するとすれば、これまでの英語授業によってスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの四技能および文法力が伸びたと思うか、という質問(質問10, 12~15)に対して、回答の平均値が3を下回っていることに注目したい。この結果は、英語教員が学生の英語力を伸ばすために、第3章で述べてきたような授業や課外活動を熱心に行っているにもかかわらず、学生たちは必ずしも、英語力が身に付いたとは思っていないということを示している。

では学生はどのような授業を望んでいるのであろうか。学生の希望を問うた質問24には約100人程度が回答しているが、大きく分類すると、a)英会話、b)ゲーム形式、c)内容が実践的なもの、d)好きな音楽を題材にしたもの、e)映画を使ったもの、f)TOEICに特化した授業、といった授業内容が挙げられていた。これらの希望を全て盛り込んだ授業を40人のクラスで効果的に実施することは難しいかもしれない。また、映画や音楽を使うときには著作権にも配慮する必要がある。しかし、ある学生の一言は英語教員にとって大いに反省させられるものであったので以下に引用したい。

「やりたくはないだろうが、宿題を出す。英語教員が各々の授業のやり方を見直す。というか考え直すべき。こんな授業で学生は英語ができないなんて言われても「は?」となる。英語が必要だと説いている割に授業内容ははっきり言って駄目だ。」

「今の授業のままでよい」と回答している学生もいたが、やはりこのような学生の意見は真摯に受け止め、授業を改善していく必要がある。今回の調査ではゲーム形式を望む声も多かったので、今後はゲーミフィケーション(gamification)が授業改善の一つのキーワードになってくるのではないかと考えている。

## 5. 今後の展望

以上に、香川高専詫間キャンパスの英語教育の取り組みについて述べ、その効果について考察してきた。少なくとも外部試験のスコアと質問紙調査の結果を見る限りにおいて、これまでの取り組みは成果が上がったとは言えない。その理由として以下の5.1~5.3までの3点が考えられる。

### 5.1 個々の取り組みが統合されていない

第3章で述べてきたような取り組みは、個々の活動

としては短期的には学生の学習意欲を高めているかもしれない。しかし、残念ながら現時点ではこれらの個々の活動が、統合的かつ継続的に行われているとは言いがたい。図3に示すように、個々の活動が単発的なイベントにとどまらないように、個々の活動をより洗練し、熟練度を上げ、それが普通の授業を核として結びつき、その相乗効果によって成績向上に結びつける努力が英語教員として必要になる。

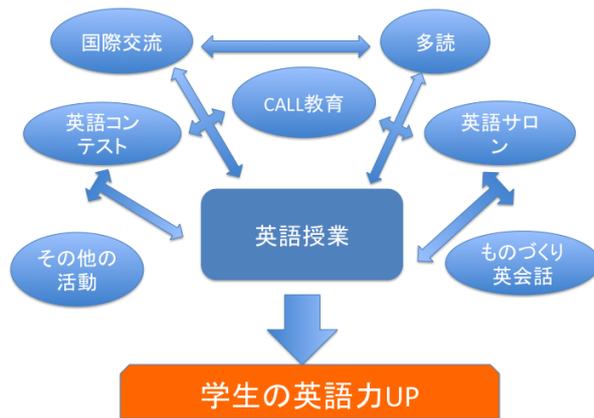


図3. 各活動の統合イメージ

例えば英語コンテスト出場学生に対する指導であるが、現状ではたった数名のために相当の労力を割いていることになり、これでは人的費用に対して教育効果は薄いと見える。そこで今後はコンテストへの参加がより積極的になるように、低学年での授業の内容を文法や読解中心にしたものからオーディオリンガルを中心としたものに主軸を移していく必要があるといえよう。そしてそれらの授業の副産物としてコンテストの参加があるという状況になれば、コンテストに参加しない学生も発音や聴力を今以上に鍛えることができる。

活動の統合の一つの試みとして平成24年度に行った事例の一つを挙げる。国際交流活動の一環として正修科学技術大学から教員を招聘した際、プレゼンテーションコンテストの発表を招聘教員に見せて指導を仰いだり(写真5)、英語サロンに参加している学生には積極的に招聘教員と交流をさせたりして、各活動を結びつける努力をした。これには、英語サロンやコンテストに参加している学生に、サロンやコンテストのために英語を勉強するのではなく、外国人と話すためにサロンやコンテストで英語を勉強しているのであるということを改めて気づかせる狙いがあった。今後はこのような活動の結びつきをさらに増やしていきたい。



写真5. 招聘教員によるプレゼンテーションの指導風景

## 5.2 学習意欲が低く、家庭学習の時間が少ない

学習時間が短い理由は、高専生には大学受験という「人生の一大事」が無いことが最大の理由ではないだろうか。そこで大学受験に代わるものとして、平成25年度からは詫間キャンパスにおいて1,2年生にはTOEIC Bridgeを3,4年、および専攻科1年生にはTOEIC IPテストを実施することが決定されている。TOEICのスコアは就職活動の際に提出を求められることもあり、また大学編入や専攻科受験の際、英語試験の一部として扱われることもある。そこで、TOEICスコアを高めることは学生にとってメリットになり、これが英語学習に対する一つの動機づけとなるであろう。

ただし、TOEIC IPテストは詫間キャンパスの3年生を対象に実施した場合、難易度が高すぎてついていけないことが懸念されるため、授業において相当量の対策が必要であろう。

## 5.3 英語力が身についたと思わせる授業が不足している

質問紙調査で浮き彫りになったように、教員の努力とは対照的に、学生は授業で英語力が身についたとあまり感じていない。教員が学生の力を伸ばそうと一生懸命に課題を出せば出すほど、学生の心は離れていっているのではないだろうか。このような悪循環を断ち切るには、やはり学生が「面白い」、「楽しい」と感じ、結果として「英語力が伸びた」と思えるような授業をしていく必要がある。

しかし、市川(2005)<sup>9)</sup>が指摘するように、単に“fun”では学生に飽きられてしまうので、“interesting”と思わせる授業にしなければならない市川(2005:75-76)。授業を“fun”から“interesting”にすることは相当な工夫が必要で、これまでの英語教育研究の知見を最

大限に活用しつつ、異なった分野、例えば専門学科の指導法なども取り入れ、教材も開発していく必要がある。そのためには英語教員間のみならず、専門学科教員との連携は必須である。

最後になるが、外部試験のスコアや質問紙調査の結果のみを参照すると、これまでの取り組みの成果について否定的にならざるを得ないが、必ずしも失敗であると結論づけることはできない。むしろデータとしては現れない部分において、これらの取り組みが成功に結びついているのではないかと考えられる部分もある。

例えばThe American Nuclear Society が主催した12th International Conference on Radiation Shielding および17th Topical Meeting of the Radiation Protection and Shielding Division of the American Nuclear Society において、詫間キャンパス専攻科2年生が発表した英語論文が部門別最優秀論文賞を受賞している。また、全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストも5年生3人の1チームが予選を勝ち残って本大会に出場し、四国地区高専英語スピーチコンテストでも4年生1名が3位に入賞している。そのほか、近年では海外での学会に参加し、英語で発表する学生も増えてきている。今後はこのような成功事例が積み重なるように、本稿で述べてきたことを一つずつ着実に実践し、その効果を検証していくことも必要であろう。

以上、当論文では「英語科」としての英語教育のこれまでの約10年間の活動の蓄積を述べてきたが、今後は英語科と専門学科による英語教育の10年間の論じていくことができるように、連携を進めたい。

#### 注記

- 1, レゴ・ブロックを使用したものづくり英会話については森(2010)<sup>7)</sup>を参照されたい。
- 2, 詫間キャンパスにおける多読図書の導入については藤井(2011)<sup>8)</sup>を参照されたい。
- 3, 質問紙調査の質問項目は埼玉県立総合教育センターのウェブサイト上にあるアンケート用紙 [http://www.center.spec.ed.jp/d/h19/kyouiku/katei/kenkyu\\_03/gaikokugo/siryou1\\_1.pdf](http://www.center.spec.ed.jp/d/h19/kyouiku/katei/kenkyu_03/gaikokugo/siryou1_1.pdf) や、有道(2009)<sup>9)</sup>を参考にした

#### 参考文献

- 1, 田村聡子, 英文法の基礎力低下と英語嫌いの原因を探る: 新入生アンケートと英語診断テストから分析される要因, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第29号, pp.9-16, 2010
- 2, 宮本友紀, 高専生の英語学習における不安につい

ての予備的調査, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第29号, pp.111-118, 2010

3, 西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃, 工学系学生の苦手意識を克服し自律学習へ導く英語多読授業, 工学教育, 58-3, pp.12-17, 2010

4, 種村俊介, 英語多読の実践と英語多読が学習者の語彙サイズに及ぼした影響について, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第29号, pp.49-58, 2010

5, 森和憲, 高専生の英語学習意識調査—高校生と高専生を比較して—, 高専教育, 第28号, pp.137-142, 2005

6, 市川力, 「教えない」英語教育, 中央公論新社, 2005

7, 森和憲, レゴ・ブロックを利用した英会話授業, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第29号, pp.35-42, 2010

8, 藤井数馬, 詫間キャンパスにおける英語多読環境の構築, 香川高等専門学校研究紀要, pp.97-107, 2011

9, 有道祐子, 英語授業アンケートの分析, 高松工業高等専門学校研究紀要, 第44号, pp.9-18, 2009